

過去7年間の医薬品使用状況

伊藤立志

当院における医薬品の使用動態に関する統計は、昭和46年より内用剤・注射剤・外用剤・試薬に分類し、品目数・購入量・購入金額等について作成している。更に昭和50年度から重点管理方式を採用し、年間100万円以上（薬価基準による算定）の金額になる医薬品を各品目別に薬価・納入価・差益等についてはいうまでもなく、メーカー別・薬効別についても詳細な分析を行なっている。今回は購入金額を中心とした過去7年間の医薬品の推移について記述する。

① 剤型別による医薬品の採用品目数

表-1は昭和46年度下半期（昭和46年10月1日～昭和47年3月31日）から52年度下半期までの剤型別による採用品目数である。昭和46年度以前には約1450品目もあったものが、薬品委員会を組織することによって、昭和46年度では1328、又昭和50年度下半期より1100品目台に減少し、全国的に同規模の病院と比べてよくコントロールされている。ちなみに過去7年間における薬品委員会の実績について示したものが表-2である。新規採用並びに陳旧薬品を適宜削除したものの7年間の平均数をとってみると、採用した医薬品は44.25品目で、削除したものは61品目であった。

② 剤型別による医薬品購入金額動態の推移

表-3は医薬品購入金額統計表であり、表-4は昭和46年度を基準年とし、各年度の購入金額比を表にしたものである。表-3および表-4からは、各剤型別による購入金額の年度別推移がわかりにくいので、これらの表から得られた数値をもとにして分析したのが図-1、図-2、図-3である。図-1は表-4を図示したものである。まず、内用剤についてみると、47年度は3.3%、48年度は15.3%、49～52年度までは毎年約20%の伸びを示し、52年度で

は購入金額が46年度の2倍強になっている。

注射剤については、47年度は138.9%と上昇するが48年度は118.6%と下降している。又、49～51年度では毎年度10%台の伸び率を示めすが、52年度では3.4%の伸び率になっている。

外用剤については、47、48年度は約20%の伸びを示めし、49年度では177.6%と急上昇する。50～52年度はあまり変化がないが、52年度では購入金額が46年度の2倍近くになっている。

試薬（臨床検査用）については、毎年上昇しており、50年度では46年度の2倍強、52年度では338.1%と約3.4倍の購入金額に達する。

表1. 当済院の薬品購入種類

	内	注	外	計
	種	種	種	種
46年度下期	602	480	246	1,328
47年度上期	575	413	247	1,235
下期	596	412	274	1,282
48年度上期	557	409	265	1,231
下期	541	422	268	1,231
49年度上期	549	442	276	1,267
下期	511	438	266	1,215
50年度上期	521	437	249	1,207
下期	524	406	249	1,179
51年度上期	524	406	252	1,182
下期	514	404	246	1,164
52年度上期	509	411	246	1,166
下期	502	387	237	1,126

内（内服剤） 注（注射剤） 外（外用剤）

表2. 薬品委員会での審査結果品目数

年度 區別	46	47	48	49	50	51	52	53	平均
採用	59	51	33	41	29	55	38	48	44.25
削除	130	46	72	65	28	53	49	45	61

表3. 薬品購入金額統計表

(単位 円)

年度 項目	46	47	48	49	50	51	52	53
内用薬	142,589,377	147,304,991	169,064,070	195,974,606	240,141,650	256,977,006	291,452,508	
注射薬	141,841,890	197,088,167	168,224,541	188,553,807	206,387,509	228,703,394	233,427,635	
外用薬	14,430,768	17,028,789	20,172,415	25,132,274	27,254,190	27,127,681	28,742,166	
試薬	4,382,824	4,998,587	5,772,754	7,928,195	9,848,985	10,986,676	14,818,637	
総出庫金額	303,244,859	366,420,534	363,233,780	418,088,882	483,632,334	523,794,757	568,440,946	

出庫金額は実際に使用した金額と殆んど変わらない。

表4. 昭和46年度を基準年とする購入金額指数

年度 項目	46	47	48	49	50	51	52
内用薬	100	103.3	118.6	137.4	168.4	180.2	204.4
注射薬	100	138.9	118.6	132.9	145.5	161.2	164.6
外用薬	100	118.0	139.8	177.6	188.9	188.0	199.2
試薬	100	114.0	131.7	180.9	224.7	250.7	338.1
総出庫金額	100	120.8	119.8	137.9	159.5	172.7	187.5

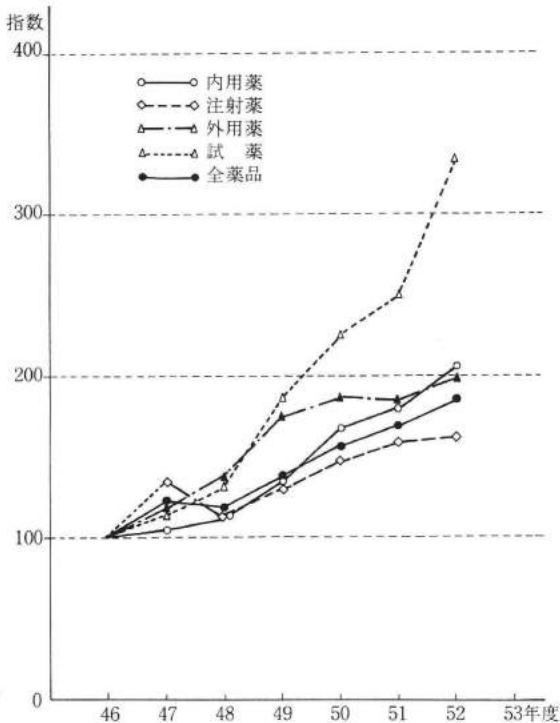
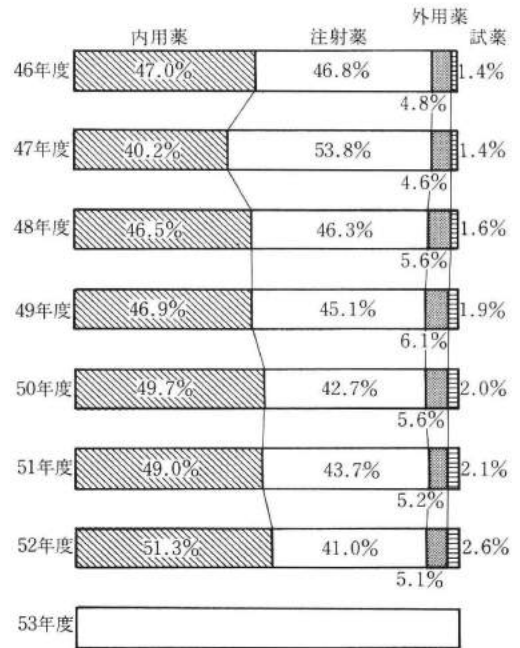
図-1 剤型別による薬品購入金額、動態の推移
(基準年度：昭和46年度)

図-2 剤型別購入金額比率の推移

総購入金額の指数と剤型別購入金額の指数をみると、内用剤については、46～49年度までの伸び率はそれほどではないが、50年度から急に上昇して、伸び率は殆んどパラレルな関係である。このことは50年度から、内用剤の購入金額が全薬品購入金額の中で占める比率が約50%に達していることからみても当然の結果と言って良いであろう

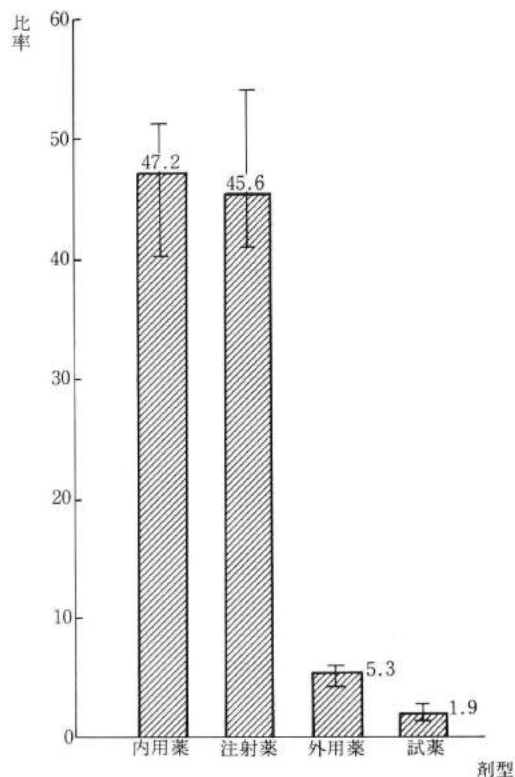


図-3 剤型別購入金額比率の中央値, 最大値, 最小値

内用薬

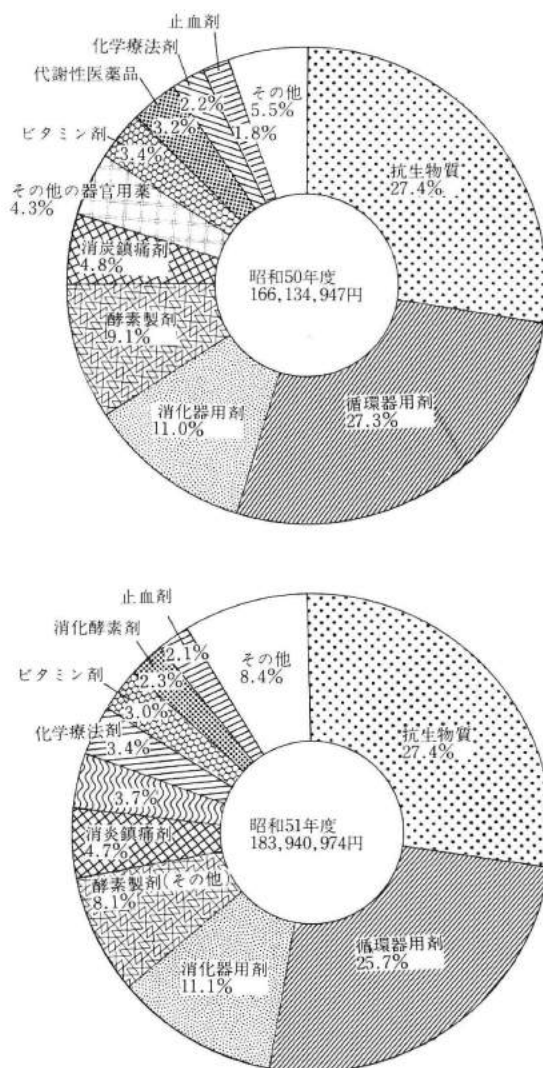


表5. 薬品総出庫金額の中に占める比率 (一品年間薬術購入額 100万円以上)

(単位 万円)

項目 年度	内用薬			注射薬			外用薬			計		
	A	B	B/A×100	A	B	B/A×100	A	B	B/A×100	A	B	B/A×100
50	24,014	16,614 (70)	69.2	20,639	16,700 (40)	80.9	2,725	1,553 (11)	57.0	47,378	34,867 (121)	73.6
51	25,697	18,394 (86)	71.6	22,849	19,207 (42)	84.1	2,713	1,354 (6)	499.9	51,259	38,955 (134)	76.0
52	29,145	22,107 (88)	75.9	23,291	19,557 (47)	84.0	2,874	1,126 (6)	39.2	55,310	42,790 (141)	77.4

A—出庫金額

B—一品年間薬術購入額 100万円以上の出庫金額

()—品月数

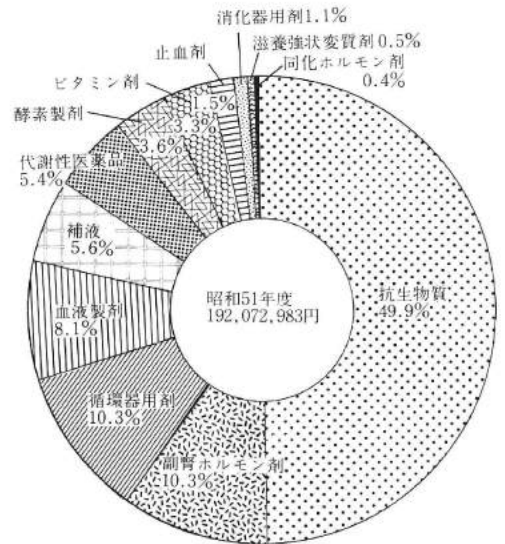
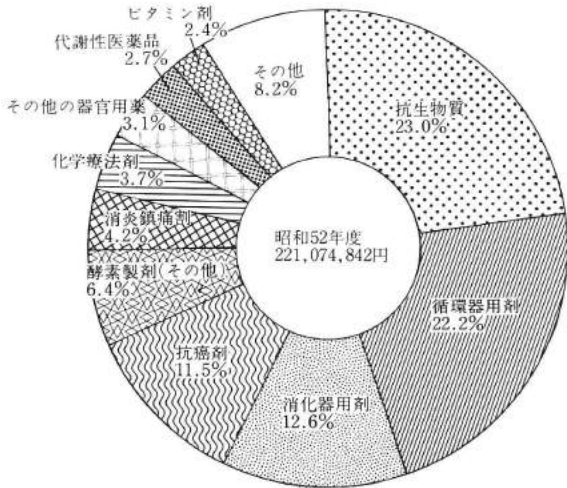


図-4 薬効別による医薬品の消費金額比率の比較 (納入価)
(一品年間薬価購入額 100 万円以上の出庫金額)

う。52年度の伸び率は、経口用抗癌剤の使用量の増加が影響しているものと思われる。

注射剤については、47年度以外は低い伸び率を示している。49～51年度は総購入金額と平行して伸びているが、52年度はやや下降線をたどっている。

外用剤については、51年度だけが低い伸び率を示しているが、他は毎年上昇している。49～50年

注射薬

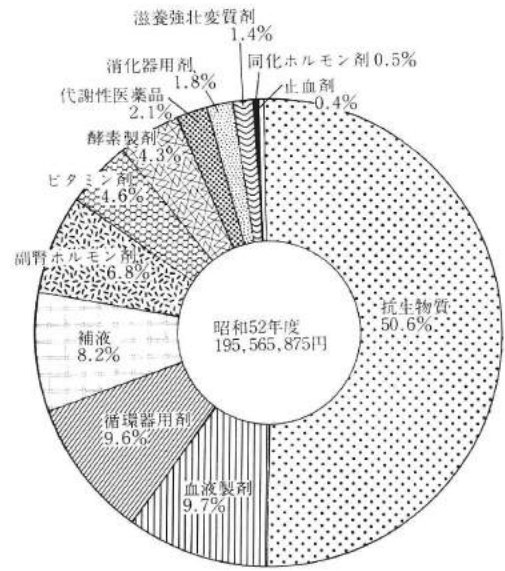
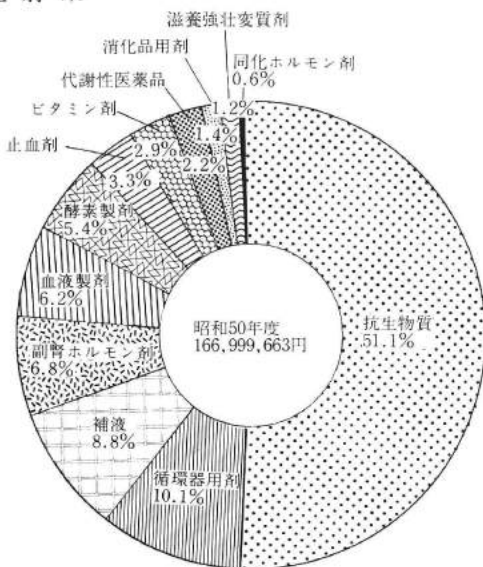


図-5

度の伸びは昭和49年来の石油ショックによる外用剤の価格高騰が影響し、又、52年度の上昇は高価な消毒薬の使用量の増加が影響しているものと思われる。

試薬(臨床検査用)については、48年度から急上昇を示し、52年度が338.1%と過去7年間における剤型別購入金額の中で最大の上昇率を示している。

図-2は各剤型別購入金額の比率を年度毎の推

移として図示したものである。

内用剤の占める比率は46年度に47%であったのが、47年度では40.2%と減少し過去7年間の最小値を示しているが、以後、経年的にその比率は増加し、52年度には51.3%と最大値に達している。

注射剤においては、47年度は53.8%と最大値を記録しているが、その後は経年的に漸減する傾向を示し、52年度には41%まで低下している。

外用剤は、46年度に4.8%であったのが、ほぼ経年的に増加し49年度には6.1%と最大値に達している。以後、減少傾向を示し、52年度では5.1%になっている。

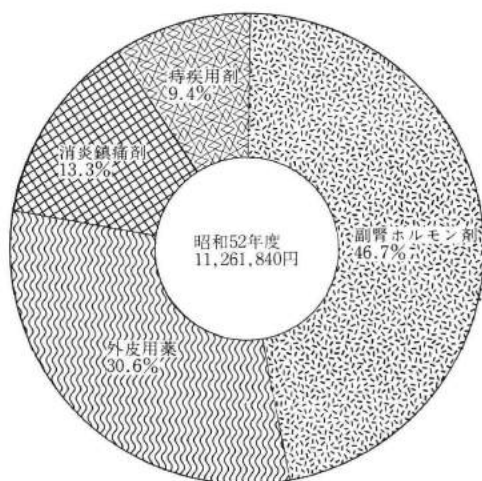
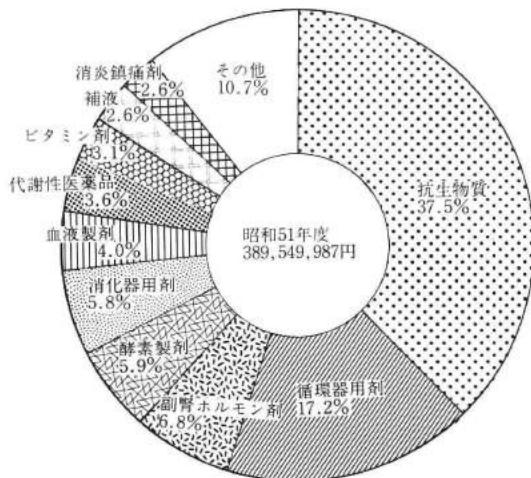
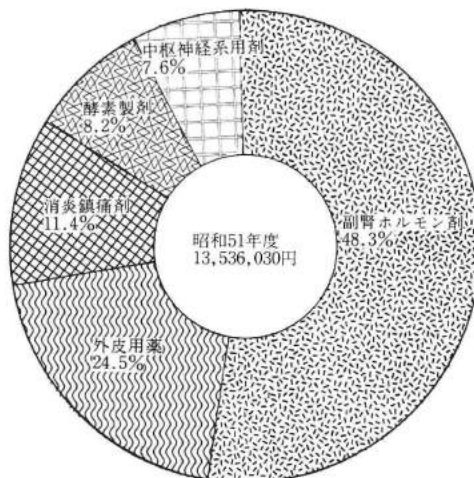
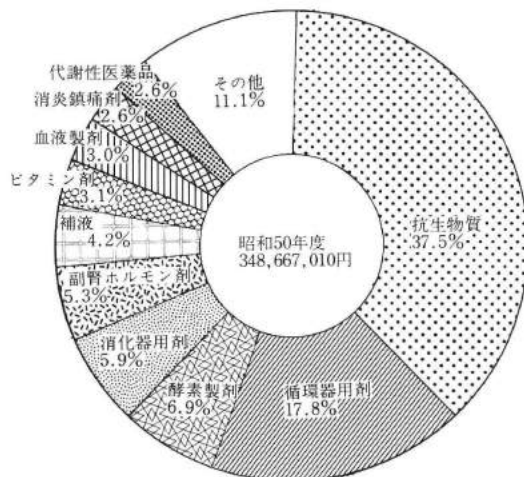
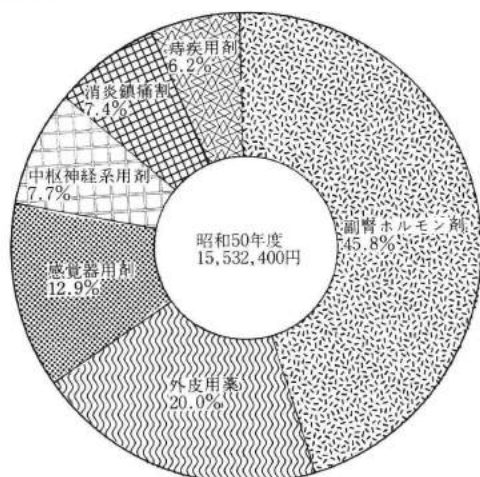


図-6

外用薬



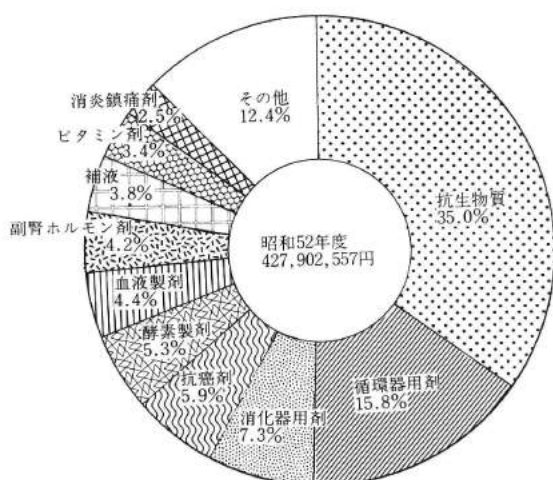


図-7

試薬（臨床検査用）においては、46年度に僅か1.4%でしかなかったものが、以後、経年的に増加して52年度には2.6%と、46年度の約2倍にも達している。

図-3は46年度から52年度に至る7年間の剤型別購入金額比率について、その中央値、最大値および最小値を示したものである。簡単に説明すると、内用剤の中央値は47.2%で、最大値は51.3%(52年度)、最小値は40.2%(47年度)となっている。注射剤の中央値は45.6%で、最大値は53.8%(47年度)、最小値は41.0%(52年度)となっている。

また、外用剤の中央値は5.3%、最大値は6.1%(49年度)、最小値は4.6%(47年度)であり、試薬についてはそれぞれ、1.9%、2.6%(52年度)、1.4%(46、47年度)となっている。

③ 重点管理医薬品の経年的推移について

重点品目順位の一覧表を作成するにあたって、一年間に1品目あたり薬価基準で算定した値が100万円以上になる医薬品を金額の大にな順に並べた。

表-5は剤型別に総購入金額に対する重点管理医薬品の購入金額の占める比率を示したものである。ごく簡単に説明すると、内用剤の50年度における全購入品目数は522.5点、購入金額は24,014万円であり、100万円以上のものは70点、16,614

万円で、内用剤総購入金額の69.2%を占めている。

注射剤については40点で80.9%、外用剤では11点で57.0%である。全購入品目数からみた場合、121品目数で73.6%を占めることになる。即ち全購入品目の10.1%が総購入金額の73.6%を占めていることがわかる。51年度は134点で76.0%、52年度は141点で77.4%と、重点管理品目数は増加の傾向にあり、それに伴って総購入金額に対する比率も高くなっている。

④ 重点管理医薬品の薬効別による購入金額比率の比較

図-4、図-5、図-6は剤型別による医薬品の購入金額比率を50年度、51年度および52年度について比較したものである。図から明らかなように、内用剤では50年度、51年度および52年度とも抗生物質が1位を占めており、その比率は、50年度(27.4%)と51年度(27.5%)で変化はないが、52年度(23.0%)にやや減少している。循環器用剤は経年的に僅かながら減少傾向にあるが、2位を占めている。消化器用剤については3位で、50年度(11.0%)と51年度(11.1%)は変化がみられないが、52年度(12.6%)にやや増加している。酵素製剤(その他)は、50年度(9.1%)と51年度(8.1%)に4位であるが、52年度(6.4%)で5位に落ち、抗癌剤(11.5%)が急上昇しているのが目につく。消炎鎮痛剤については、3年間とも殆んど差はみられない。

次に注射剤について分析してみると、抗生物質が3年間とも1位で、注射剤の重点管理医薬品は総購入金額の約50%を占めるという結果が出ている。循環器用剤は50年度(10.1%)と51年度(10.3%)で殆んど差はみられないが、52年度(9.6%)にやや減少している。補液は50年度(8.8%)に3位であったのが、51年度(5.6%)では減少して、52年度(8.2%)に上昇している。副腎ホルモン剤は50年度に6.8%であったものが、51年度には10.3%と急上昇し、52年度で6.8%と下降している。血液製剤・ビタミン剤については、経年的に増加しているのが注目される。

外用剤について述べてみると、副腎ホルモン剤

が各年度（45.8%、48.3%、46.7%）ともに1位を占めており、較差はあまり大きくない。外皮用薬が52年度に急上昇しているが、これはクロルヘキシジン等の使用が影響しているものと思われる。又、消炎鎮痛剤は経年的に比率が増加している。

図-7は内用剤・注射剤・外用剤の薬効別による購入金額比率をまとめて、年度毎に比率したものである。過去3年間の薬効別購入金額の推移を

みる限り、上位5つの薬効群すなわち抗生物質・循環器用剤・副腎ホルモン剤・酵素製剤・消化器用剤等の合計が、重点管理医薬品の総購入金額の約70%にも達していることがわかる。又、今後の傾向として、抗癌剤・消化器用剤・血液製剤等が漸増するとみてよいのではないだろうか。

（昭和54年10月1日 受理）



The advertisement features a central image of a key on a chain, with several white tags hanging from the chain. The tags are labeled with medical departments: 耳鼻咽喉科 (Otorhinolaryngology), 整形外科 (Plastic Surgery), 産婦人科 (Obstetrics and Gynecology), 内科 (Internal Medicine), 泌尿器科 (Urology), and 外科 (Surgery). The Meiji logo is in the top left corner.

各科領域の緑膿菌・変形菌による感染症に

日抗基 試験シベカシン

P パニマイシン

PANIMYCIN FOR INJECTION ● PANIMYCIN INJECTION

●特長

- * グラム陽性菌・陰性菌に殺菌的に作用します。
- * 緑膿菌、変形菌による感染症にすぐれた効果を示します。
- * 多剤耐性の肺炎桿菌、大腸菌および黄色ブドウ球菌による感染症にも有効です。
- * 筋注ですみやかに血中に移行し、腎・肺に高濃度で認められます。
- * 活性のまま高濃度で尿中に排泄されます。

●適応症

緑膿菌、変形菌による下記感染症および肺炎桿菌、大腸菌、黄色ブドウ球菌のうち、カナマイシンを含む多剤耐性菌で、シベカシン感受性菌による下記感染症

- 敗血症 ● 膿瘍、瘻、病腫症、蜂窩織炎 ● 扁桃炎、肺炎、気管支炎
- 腹膜炎 ● 腎盂腎炎、膀胱炎、尿道炎 ● 中耳炎 ● 術後感染症

●用法・用量

成人：1日量100mg(力価)を1~2回に分けて筋肉内注射
小児：1日量1~2mg(力価)/kgを1~2回に分けて筋肉内注射

なお、年令、症状により適宜増減してください。

●使用上の注意

製品添付文書を熟読してください。

* 医師等の処方せん・指示により使用すること。 (健保適用)

明治製薬株式会社
104 東京都中央区京橋2-4-16

I (0278)